



20年目のきょうも、
人と地球にやさしいアクション!

共生の時代

'08
4月

●発行:グリーンコープ共同体理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階 TEL092(481)7923 FAX092(481)7876



GM作物は
食べない!

作らない!

作らせない!

2008年度
自生GMナタネ
調査活動スタート

グリーンコープはこれからも
遺伝子組み換え反対を貫きます

1996年11月、遺伝子組み換え(以下GM)作物の輸入許可が下り、私たちの食生活に深く入り込んでくるようになりました。グリーンコープはGM問題が浮上した当初から「いのち・くらし・自然」を揺るがす問題ととらえ、さまざまな運動に取り組んできました。

これまで全国の生協や市民団体、「遺伝子組み換え食品いらない!キャンペーン」と共に展開してきた運動は、GM作物の開発・研究の阻止やGM汚染防止、GMフリーゾーンの形成へと広がりをみせています。自生GMナタネ汚染調査活動もその一つです。

ナタネのGM汚染は 日本の生物多様性に影響大

日本各地の河川敷などで見られる菜の花は外来種の西洋カラシナがほとんどで、GM西洋ナタネと交配する確立は30%とされている。ナタネは他家受精植物でキャベツ、ハクサイ、ダイコン、カブなどと同じアブラナ科に属しており、これらは風媒、虫媒で比較的簡単に交雑してしまう特徴がある。ひとたび交配が起これば日本の農作物だけでなく、ひいては生物多様性や生態系へ及ぼす影響は計り知れない。

ネが生自していることが分かりました。以降、自生GMナタネ調査活動に多くの組合員が参加し、市民による監視活動として定着しています。各単協ではGM汚染を

食い止めるために地方自治体、製油会社に対しては輸入ナタネ種子の飛散防止対策や自生GMナタネの刈り取りなどを求めています。



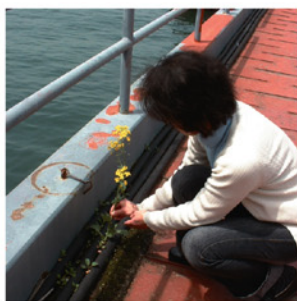
調査生協名	調査地点	一次陽性	
		ラウンドアップ耐性	バスタ耐性
グリーンコープ生協おおさか	3	0	0
グリーンコープ生協ひょうご	4	0	1
グリーンコープ生協とっとり	9	0	0
グリーンコープ生協(島根)	5	0	0
グリーンコープ生協おかやま	10(8)	0	0
グリーンコープ生協ひろしま	3(5)	0	0
グリーンコープやまぐち生協	7	0	0
グリーンコープ生協ふくおか	402	14	9
グリーンコープ生協さが	14	0	0
グリーンコープ生協(長崎)	20	0	0
グリーンコープ生協くまもと	37	0	1
グリーンコープ生協おおい	74	0	0
グリーンコープ生協みやぎ	10	0	0
グリーンコープかごしま生協	22	0	1
合 計	620	14	12

※グリーンコープ生協ひろしまが調査した2地点が岡山県に含まれています。

2007年度はグリーンコープ生協おおさかとグリーンコープ生協ひょうごを含む全単協が取り組み、グリーンコープエリア内620カ所を調査を実施しました。

この間、汚染がすすんでいた博多港周辺に加え、新たに熊本県八代市や鹿児島県志布志市(大隈半島)でも自生が確認され、確実にGM汚染が広がっていることが分かりました。

2007年度 自生GMナタネ 調査結果



このような取り組みをとおしてGM問題に警鐘を鳴らし、社会にアピールしています。

2008年度
調査活動スタート!

GMによる研究・開発は今や動物の分野にまで及んでいます。グリーンコープはこれからも生物の遺伝子組み換え、生命さえも操作する技術に反対の姿勢を貫いていきます。

2008年度も各単協で、自生GMナタネ調査活動がスタートしました。

3面に関連記事

Contents

グリーンコープを創った人たち(1) グリーンコープ連合初代会長 故武田 桂二郎	
共生とは、「私」と「あなた」の関係を 無限につくりあげていくこと	2
いのちを育む食べものだから グリーンコープの安心・安全	4・5
メーカー・生産者からのメッセージ(1) オルター・トレード・ジャパン	
民衆交易事業によって南北連帯をめざす	6
GREEN ACTION 20th 掲示板 グリーンコープがめざす生活協同組合①	7
組合員・ワーカーズ・職員リレーメッセージ 未来へつなぐ20年 私の思い	8

20年の歴史を創った原点に戻る



グリーンコープ連合
初代会長 故 武田 桂二郎



武田桂二郎がグリーンコープの歴史の表舞台に登場したのは、1988年グリーンコープ連合結成時、初代会長としてであった。40歳前後の団塊世代がひしめく中にあって、白髪に濃いサングラスの武田はひととき異彩を放っていた。

その印象にたがわず、武田の口から繰り出される鍛えられた正確な言葉はしばしば難解であったが、彼はつまるところただ一つの思想について語っていた。それがグリーンコープの背骨になった。

共生とは、「私」と「あなた」の関係を無限につくりあげていくこと

武

田桂二郎は1925年福岡県三潴郡大善寺町（現久留米市）に生まれた。生家は酒造業を営んでいたが、彼が生まれる前に火災に見舞われ、それ以降かつての生活レベルを保つことはなかなか困難であったようだ。加えて1931年には満州事変が勃発しており、軍靴の音が次第に高くなっていくという環境で彼は少年時代を過ごす。もともと武田の場合、生来の鋭い感受性のため「無邪気な」と形容される子ども時代は極端に短く、小学校に入學して2、3ヵ月後には学校と教師に不信感を抱いていたという。小中学校をとおして、学校とは「一日も早く通過するところだ」と思っていた。その後述懐しているから、その早熟ぶりは半端ではなかった。

統制の時代を抜けて

詩に傾倒した福岡高校時代。その後は東京大学文学部仏文科へ進学するが、学業半ばで学徒出陣。人間魚雷「回天」に乗る予定であったが、終戦を迎え、一挙に生き続けられる未来が開ける。武田、20歳だった。

23歳の夏、状況とようやく折りあいをつけた彼のところに、故郷の新制中学の英語教師の依頼が舞い込み、武田は教壇に立つのだが、それは鮮烈な経験となった。

生徒たちは武田の言葉の一つひとつに机を叩き、躍りあがって喜んだのだ。その「狂乱ぶり」に武田は衝撃を受けながら理解する。彼らの喜びとは自分の言葉を発見した喜びなのだ。考えてみれば生まれてこの方、言論統制と教育勸語の時を生きたしかなかった生徒たちだった。彼らは言葉に飢えていた。

武田は気付く。生徒とは、そのように自らを育てようとする存在なのだ。それなら相対する教師もまた、自分を教育し自身の言葉を持たなければならぬ。教育とは「教える」という一方通行ではなく「育ちあひ」という相互の関係なのだ。

そう整理した一方で、自分の限界がどうしても見えてしまう武田は、3ヵ月で教壇を去り再び上京するのだが、出発の日生徒たちは学校を休み、6キロの道を旗を立てて彼を追い、駅頭で合唱して武田を見送った。

伝習館闘争を生きた

3年後、生徒たちとの対話の日々に引かれるように柳川に戻ってきた武田は、英語塾を主宰する一方で、同人誌の発行など旺盛な文化活動を繰り広げる。そうした平穏な日々には、1970年武田45歳の時、伝習館三教師処分事件が不条理きわまりないものとし



1992年共生・平和長崎自転車隊。武田はいつも先頭に立ち、子どもたちを背中を感じながら走っていた。子どもたちへのまなざしは、まさにやさしい「おいちゃん」だった

て彼に襲いかかる。三教師を護る立場の福岡教組は立たず、彼はただ独りで異議申し立てを決意する。国家に対する闘争の長期化を予想し、武田は社会科の教師であった妻の孝子、盟友津村佐喜子、三教師の一人、茅島の妹である東桂子、三教師の教え子であった加藤裕子をはじめとする二桁に満たない仲間と共に柳下村塾を結成し、託児所を開設する。封建制の強い地域からは当然孤立した。それまでの生活の一切が覆り、国を相手に生きるか死ぬかの闘いがはじまった。その壮絶さを数字で言うと、1年間に4000人の支援者が柳川の彼の家を訪れ、武田の歯は2年間にぼろぼろと6本抜けた。

この闘いの中で彼はしみじみ思う。国を揺るがした三池闘争も実を結ばなかつた。それは地域と職場が切り離されていることが大きくあるからだ。職場で革新的な言動をしていても、自宅のある地域に帰るとたちまち保守に転じざるを得ないようなねじれた状況が人間の心も関係も引き裂いていく。地域をもう一度自分たちの手に取り戻さなくては人間の未来はないのではないかと。その願いはやがてグリーンコープの究極の願いとなる。

人間の可能性をグリーンコープに託す

ところで、開設した託児所の子どもたちと向きあう日々は平和を願って毎夏取り組んでいる「長崎サイクリング」のように片方で豊かに展開されていた。また、預かった子どもたちに安全な食糧をという配慮が、「食糧の共同会」

の創設となり、「共生クラブ生協」へと発展し地域へ根付いていく。そのような時、各地に点在していた小さな地域生協がそれぞれ経営難に陥り、生き延びるためにグリーンコープを結成しようという動きに出会う。その結成までの道のりは、それはそれで人間同士が生でぶつかるという状況を生み出すことになったが、武田の存在と人間観が行き惑う人の心を解きほぐし、あるいは鼓舞し、グリーンコープはようやく誕生に至った。武田はすでに63歳だった。20世紀という時代は戦争と科学技術の発展に象徴される。武田の前にはいつも向かわねばならない膨大な現実だけがあつた。中でも戦争という人間の最大の不幸に対してどのようにそれを回避するか、彼はその方法をグリーンコープの後輩たちに、時と場所と人に応じていかに語った。それが「私とあなたの関係を無限に高めあっていく」共生の思想であつた。

地球はもう数十年前から悲鳴をあげ続けている。もう間にあわないという人もある。でも、「もう間にあわないから、しないということにはならないでしょう」という武田の言葉はいつまでも響き続けている。人間を愛し愛された武田は渾身の力を振りしぼって会長職を務めあげ、1994年69歳で没した。

※1970年6月福岡県教育委員会が、日本史などの授業で、教科書だけではなく他の参考書や教師が作成したプリントを使うなど、学習指導要領に沿わなかったことを理由に伝習館高校の社会科三教師を懲戒免職した。これに対して3人が処分取り消しと処分の執行停止を求めて提訴した

GM作物は
食べない!
作らない!
作らせない!

遺伝子組み換え

GM汚染から日本の農作物を守ろう

—2008年度自生GMナタネ調査活動スタート—



- 講演
- 質疑応答
- 行政への取り組み報告
各地域本部から
- 2008年度自生GMナタネ調査
活動について

講師 天笠啓祐さん
遺伝子組み換え食品いらない!
キャンペーン代表、市民バイ
オテクノロジー情報室代表

2007年度の自生GMナタネ調査でグリーンコープ生協くまもとのエリアにある八代港周辺でGMナタネが自生していることが分かりました。各地域本部では、このような事態をきちんと受け止め、行政への自生・交雑の防止についての要請行動に取り組みました。その報告と2008年度の調査活動の事前学習を目的とした学習会が開催され、組合員をはじめワーカーズ・代理人ネットワーク・生産者・メーカー・行政関係者など215人が参加しました。(2月12日：熊本市民会館)

講演要旨

日本では1996年秋にGM作物の輸入許可が下り、注目されるようになりましたが、GM技術の実用化はあまりすすんでいません。現在GM化されているのは「除草剤耐性作物」と「殺虫剤耐性作物」のみで、これらは単純な技術です。植物の成長を促進したり、おいしくしたりするなど、植物の生態に介入する高度なGM技術は難しく実用化の目途は立っていません。日本は世界最大のGM作物の輸入国。代表的なGM作物はトウモロコシ・大豆・ナタネ・綿で、多くは食用油の原料です。油を搾ったあとの搾り滓の多くは家畜の飼料となつていきます。しかし、今の日本の不十分なGM表示制度では、消費者は日常的に非GMを選ぶことが困難な状況におかれています。

GM作物栽培が急速に拡大しているオーストラリアで昨秋、GMナタネ栽培のモラトリウム(一時停止)法の解禁が争点になりました。連邦政府はGM推進の立場をとっており、アメリカや種子企業からの圧力を受けてきた各州政府はモラトリウム解禁を迫られていました。このような状況を受けて、これからの貴重なnon-GMナタネ栽培を継続してもらおうと、グリーンコープを含む日本の消費者からの「non-GMナタネを食べ続けたい!」「私たちが食べる権利を奪うな!」「私たち(署名)をオーストラリアの4つの州政府に届けました。結果、2州(ニューサウスウェールズ州・ヴィクトリア州)は解禁となりましたが、南オーストラリア州と西オーストラリア州はモラトリ

ウムを堅持し、GMナタネ栽培禁止継続となりました。

GM問題はバイオ燃料ブームと表裏の関係にあります。バイオ燃料とは植物から作られる燃料のことで大きく二つに分類されます。一つはトウモロコシ・サトウキビ・米などからエタノール(またはアルコール)を精製し燃料とする「バイオエタノール」。主にアメリカやブラジルでガソリンの代替として使われています。もう一つはナタネや大豆、パームヤシの油から脂肪酸メチルエステルを作り燃料とする「バイオディーゼル」で、軽油の代替として主にEU諸国ですすめられています。昨今のバイオ燃料ブームで原料のトウモロコシの栽培面積が拡大し、連作障害が広が

り、害虫が増えたためにその対策としてGM作物の栽培が拡大しました。このため耐性害虫が発生、伴って使用する農薬が増え、大豆・小麦の栽培が縮小しました。その多くを食料としてだけでなく畜産飼料原料として輸入している日本は畜産製品を含め食糧価格高騰の影響を受けることになったのです。また、バイオ燃料は食糧を奪うということだけでなく、ブラジルでは原料作物の栽培面積の拡大に伴って熱帯雨林を破壊し、地球温暖化を促進しているという報告もあります。

GM問題は単に食料の問題にとどまらず動物研究の分野にも広がり、地球規模の環境問題を引き起こしてしまいうな勢いです。このような待ったなしの状況に市民として「NO!」の声を上げていきましよう。

● GM作物に反対することは農業・環境・消費者・国を守ることになるのだと改めて痛感した。市民運動と行政が一体にならないければ解決できない大きな問題だ。

● 親である私たちが行動を起こすことで子どもたちを守り、未来へつなぐことができると思う。「GMは絶対に許さない!」、確固たる態度をとり続けたい。

● GMは決して安全なものではなく問題は山積している。一人ひとりがもっと学習し、みんなで力をあわせて「汚染を止める」ことが大切だ。

● 言いようのない大きな不安を感じた。引き続き、手を緩めずに調査に協力し、一人でも多くの人に広めていきたい。

遺伝子組み換え作物、その現状と問題点

参加者アンケートから

行政への取り組み報告…グリーンコープ生協くまもと…

4つの地域本部(県北・県央東・県央西・県南)ごとに展開した「請願書」、「要望書」提出の取り組みのようすが感想をまじえて報告された。2008年度は約80カ所で調査を行う。



2007年度調査活動のようす
(県南地域本部エリア)

熊本県内の各自治体への要請行動

(2008年2月8日現在)

自治体	内容	経過および結果
熊本県	請願書を議会へ提出	9月14日提出
	要望書を提出	10月1日不採択 10月2日提出(農林水産政策課担当)
熊本市	要望書を提出	8月31日提出(環境企画課担当)
荒尾市	請願書を議会へ提出	9月3日提出 9月20日の建設経済委員会で審議され、継続審議 12月議会で不採択
玉名市	請願書を議会へ提出	8月30日提出 9月18日の産業経済委員会で継続審議 12月委員会で継続審議
菊池市	請願書提出を準備中	12月議会に提出を準備したが、2008年3月議会に提出を延期
山鹿市	請願書提出を準備中	紹介議員と協議中
植木町	請願書を議会へ提出	9月3日提出 継続審議 12月紹介議員と意見交換会 12月議会において継続審議
八代市	請願書を議会へ提出	9月5日提出 継続審議 12月7日 経済産業委員会で採択 12月14日 本会議開催 採択
	要望書を提出	9月11日提出
合志市	請願書を議会へ提出	11月16日提出 12月11日 産業建設委員会で継続審議 12月20日 本会議で継続審議
大津町	2008年6月議会提出へ向け準備中	
益城町	要望書を提出	12月5日提出
南阿蘇村	要望書を提出	12月13日提出

プの と安全

グリーンコープは誕生から20年、「食べものの安心・安全とは」を追求してきました。その基本姿勢として「国産原料」「容器包材はびん・缶」「手作りを大切にする」「生産者との顔の見える関係」など、食べもののあるべき姿を大切に、グリーンコープができることに取り組んできました。しかも、その検討にあたっては母親である組合員が中心となっていました。そのようにして生み出される商品だからこそ、多くの組合員から支持されているのです。

グリーンコープは2001年に経済至上主義の果てに起こってしまったBSE問題を厳粛に受け止め、改めて食べものの原点に立ち返りました。受けて「経済効率優先の商品を 生命を育む食べものに戻す食べもの運動」という自らのスタンスを明確に打ち出し、力強く踏み出しました。

20周年を迎えるにあたって、改めてグリーンコープの食べものの安心・安全を確認します。

組合員の思い、 こだわりの商品に

「家族に安心して安全なものを食べさせたい」という母親の願いが、グリーンコープの商品一つひとつに込められています。それらはグリーンコープが生産者やメーカーとの信頼関係を大切に生み出してきた商品です。

グリーンコープが取り扱う商品はできる限り国産で、その原材料はできる限り産直を追求しています。しかもその検討に組合員がかかわっています。商品のコンセプトから完成まで組合員の手を経ていねいに作られている商品はかなりなのです。

培ってきた商品の考え方

野菜や米・果物などの農産物、豚肉や鶏肉、たまご

生産者と組合員の 信頼でつながる「産直」

グリーンコープは誕生して20年間、安心・安全な食べものを組合員に届けてきました。

中でもグリーンコープの前身生協の時代から30余年、「産直」へのこだわりを、最も大切にして生産者との関係を築いてきました。生産者は誠意を持って生産物を組合員に届ける、また組合員は安心して生産物を食べる、この信頼関係がグリーンコープの産直を支えています。このようにしてできる限りの産直を産直にするよう努力を重ね、現在、たまご・牛乳・青果物は100%、肉や米は80%以上が産直を実現できています。

などの畜産品は、基本的に「産直」です。グリーンコープの農業政策や飼育基準に沿って栽培・飼育されています。

加工品の原料に農畜産品を使用する場合も、それらの基準や政策に基づいた原料を使用することが基本です。魚や海藻類など水産品は基本的に天然のもの、養殖のものはホルモン剤や抗生物質を使わず、できるだけ環境に負荷をかけないものとしています。水産原料の加工所はできる限り国内としています。そして一つひとつの商品を「商品仕様書」に沿っていねいに点検しています。

商品の多様化に 대응する

グリーンコープ設立当初は、なるべく安全性にこだわった素材で手作りを大切に

し、グリーンコープの基準に照らした栽培を行えるようにしています。もちろん、できる限り有機・減・無農薬栽培をめざしています。

産直が育てる後継者

現在日本の農業は、後継者不足により危機的な状況に陥っています。

グリーンコープは、日本の農業を守ることを命題に、産直関係を培ってきました。市場主義に傾倒するのではなく、継続的に取引をし、生産者が誇りを持つて農業ができるための価格を一緒に話しあい、取り決めていきます。この関係を確立することで、生産者にとって安心して農業を続ける環境ができ、後継者も育ってきました。これによっ

にしたいと考えていました。しかし、時代の流れの中で加工食品が普及し、組合員から安心・安全な加工食品が求められるようになりました。組合員の生活スタイルの変化や要望に応え、安心できるものを開発してきました。その場合も価格や簡便さを追求するより、安全性を大切にしています。

環境を守り、ごみの減量を考えた容器や包材

環境問題を考え、びんや缶など環境にやさしい容器をできる限り使用しています。しかもびん容器はその80%をリユース化しています。プラスチックはごみの総量を減らすためにもできる

だけ使用しないようにします。トレイトトレも早くから取り組んでいます。また、安全性への不安から環境ホルモンを含むもの、食品に触れる部分へのポリ塩化ビニルやスチレン樹脂は使っていません。

2001年、日本ではじめて発生したBSE問題は、牛が牛の肉骨粉を食べるといような自然の摂理を踏みにじったことから招来しました。それを受けて、経済効率を優先させた「商品」を「生命を育むための食べもの」に戻していきたいという思いをグリーンコープは貫いています。

産直の信頼関係が生んだ 独自の安心・安全システム

グリーンコープは、生産者やメーカーと生産・製造工程の約束を交わし、信頼関係を基づいて安心・安全な食べものを作ってきました。

2003年より安心・安全を目に見る形でシステム化し、その信頼を確かなものにしました。それが「グリーンコープ商品生産・製造認証システム」(以下、認証システム)です。まず青果とたまごからスタートし、



記録されているか、栽培・飼育、製造は適正に行われているかの確認を生産者グループまたはメーカーが自主的に確認し、これをグリーンコープに報告します。これが第一者監査です。

第二者監査は、自主確認報告が正しくなされているか、自主的に改善項目に取り組んでいるかを、研修を受けたグリーンコープの担当者が現地に赴くか、または書類で監査を行います。

このようにして認証された情報は、必ず公開されるシステムになっています。グリーンコープと生産者が真摯に築いてきた産直の信頼関係に「認証」のしくみが加わることで、

いのち
生命を育む
食べものだから...

グリーンコープ 安心



遺伝子組み換え食品いらない! キャンペーン発行「あぶない食べもののはなし」より

世界中の仲間と共に、 多彩な反対運動を展開しています

遺伝子組み換え 問題

1996年、GM作物の輸入開始により、食の安全が脅かされ、生態系にも変化の兆しが見られるようになってい

ます。グリーンコープはこの問題に対し「遺伝子組み換え食品いらない! キャンペーン」を中心に全国の生協や市民団体と共に、さまざまな角度から反対運動に取り組んできました。

日本では、GM食品に関する表示が不十分で、消費者にとって分かりにくいものになっています。GM作物の混入率などもあり、非GM食品を選択する正確な判断材料とはなり得ていないのが現状です。そのような状況を受けて、グリーンコープはGM情報をきちんと組合員に伝えるため、1997年からカタログに「遺伝子組換え原料不使用」などの表示をしています。

また、日本をGM汚染から守る取り組みの一つとして、ヨーロッパからはじまったGM作物を作らない地域を広げようというGMOフリーゾーン運動を、生産者と共に推進しています。

輸入したGMナタネがこぼれ落ち、自生している状況の調査も2005年から取り組み、輸入企業や行政へ働きかけてきました。

グリーンコープは、生命を操るGM問題へ反対の意志を貫き、これからの運動をすすめていきます。



熊本県八代市の小学校でのダイオキシン濃度調査のための松葉採取の様子

社会への働きかけと、自らの改革に 先駆的に取り組んできました

環境ホルモン 対策

グリーンコープは環境ホルモンが社会問題化した1999年頃から数年にわたり、環境ホルモンについての調査活動や勉強会を精力的に行いました。

環境ホルモンの危険性は未知の部分が大きく、人への影響としては、発がん性や生殖機能・免疫機能の低下などが懸念されています。環境の面では、生態系が変化する可能性も指摘されています。

家庭版の「環境ホルモンチェックシート」による生活の見直し、河川・水道の水質調査、松葉のダイオキシン調査などに取り組んできました。また、焼却することで猛毒のダイオキシンを発生させる塩化ビニルラップのメーカーへの製造中止の要請、環境ホルモンが溶け出すとされたカップ麺容器のJAS規格見直しの申し入れなど、企業や行政への働きかけを積極的に行いました。

それと同時に、環境ホルモン物質が溶出しにくい安全な食品容器トレーの開発を行い、「トレイトトレ」(トレーの回収・リサイクル)をはじめました。缶詰の容器も環境ホルモン溶出の恐れのあるものの使用を中止し、安全なタルク缶に変更しました。また、もつとも環境ホルモン物質が多いとされる農薬についても、生産者に該当農薬の排除や代替をお願いしました。

人体や環境に対し害を及ぼす恐れがあるものは、それを見逃すことなく、早急に対応し社会に訴えるグリーンコープの姿勢は、これまでもこれからも変わりません。

グリーンコープの産直の特長
グリーンコープの産直とは、具体的にどのようなものなのでしょうか。
一つは、誰が、どんな作り方をしているか分かるようになっていくということです。青果物では、栽培内容や農薬・肥料の種類や散布時期まで生産者と相談

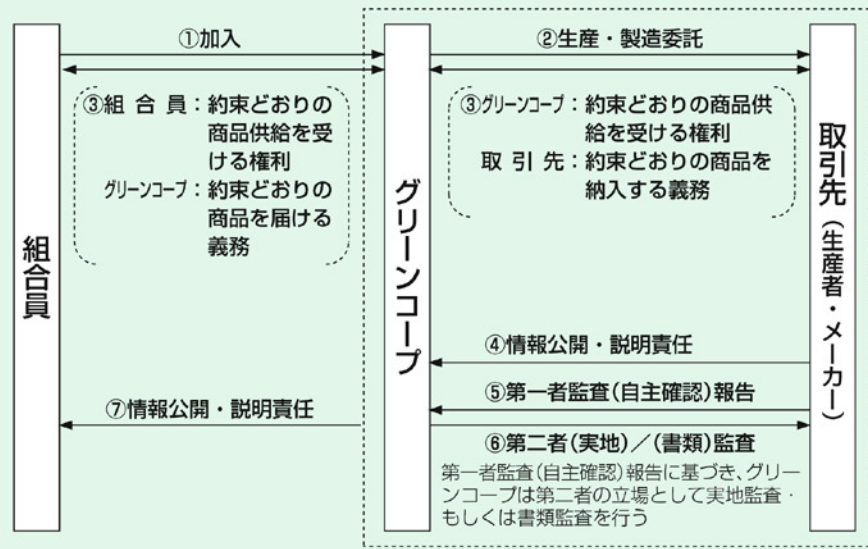


「酪農ホームステイ」で乳牛の世話を体験

て安全な商品を購入できることになるのです。
生産者と組合員が共に農業を守る立場で提携することで、グリーンコープの産直活動は、日本の農業の中で大きな意味を持つと言える

総合的に安心・安全を確認できるシステムとして確立しています。
認証システムの流れは図1のようになっています。
生産者・メーカーはまず、日々の作業を記録します。これがグリーンコープとの事前の取り決めに沿ったものになっているか、生産者個人、メーカー担当者自ら

グリーンコープ商品生産・製造認証システム概念 図1



認証システムを執行するグリーンコープの安心・安全はより確かなものになっています。

徹底した情報公開が 信頼の柱となっています

グリーンコープでは、設立当初からどんな問題でも「組合員へ包み隠さず」に知らせることを方針としてきました。どのような重大な事故や事件でも、すべての事実を組合員に公開し、絶対に事実を隠さないということです。それは、間違いが起きた時保身に走るのではなく、謙虚に間違いを受け止め、それを正す努力をすることが何よりも大切なことだという考えに基づいています。

2001年、食品の偽装事件が社会的な問題となりました。残念ながら、グリーンコープも無縁ではありません。

まず、そのことを厳粛に受け止め、社会的にも大きな存在となっているグリーンコープの責任として、組合員へ知らせると同時に、必ずマスコミにもニュースリリースし、情報を公開するという方針を定めました。その姿勢の基本は、「販売者としての責任をきちんと全うする」というもので、以降こうした姿勢を貫いてきました。それが社会的な信頼を確立させ、グリーンコープと取引をしているメーカーや生産者との関係を深めることにつながっていると言えます。

共に歩んだ20年

民衆交易事業によって
南北連帯をめざすAlter Trade Japan
オルター・トレード・ジャパン

グリーンコープはこれまで、関係する多くのメーカー・生産者との信頼をベースに、食べものの安心・安全を確立させてきました。設立から20年、あるいは設立以前から、共に歩んできたメーカー・生産者をおして見えるグリーンコープを紹介します。

第1回はATJ（オルター・トレード・ジャパン）。ATJはネグロスバナナやマスコバド糖をネグロスから日本に輸入するための、日本側の貿易会社で、グリーンコープをはじめ関係する諸団体が出資しあって設立されました。グリーンコープの「モノからコトへ」の具現化、「ネグロスとの共生・連帯」の立役者の一人でもあるATJ代表取締役・堀田正彦さんに話を聞きました。

21年前、グリーンコープが飢餓に苦しむネグロス支援のために輸入しはじめたマスコバド糖は木くずなど不純物が混じったものでした。それが民衆交易のはじまりだった。

堀田さんとグリーンコープ

の初めての出会いは1986年秋、「ばななぼーと」に参加した時だった。「ばななぼーと」とは草の根団体が主催する洋上（神戸・石垣島間）イベント。公害や原発の問題に取り組みながら安全な食べものの自給をめざして独自に共同購入を行っている全国の消費者団体（175団体・520人）が参加した。テーマの一つに第三世界との交流が掲げられ、そこにネグロスの窮状報告と自立のためのマスコバド糖輸入のお願いに、ネグロスからアラン・シーさんが来日していた。その呼びかけに、グリーンコープの前身

生協の一つである「共生社」の行岡良治さん（グリーンコープ連合初代専務理事）

ていくことになる。

1987年秋、共生社は組織としてネグロスへの緊急支援に取り組みことを決

議し、翌年には組合員理事20人がネグロスを訪問。「ネグロスの惨状を身体で感じてくれた20人の母親らの感性が、その後のネグロスとの共生・連帯形成へと導いていったのです」。

マスコバド糖とバランゴバナナの民衆による貿易を事業として成立させるために1989年10月、ATJが設立、堀田さんは専任の職員として従事することになった。その資金援助を全面的に引き受けたのがグリーンコープだった。その後、バナナ交易は台風などの自然災害や病虫害、連作障害に侵されながら紆余曲折を経て、20年という時を駆け抜けてきた。同時に、ひとときもどまることなく、日本とネグロスの連帯関係は深化してきた。

地で実ったものの排泄物はそこ土の栄養にすべきものです。私たちはネグロスのバナナを日本に輸入して食べている。そのバナナが育った分の栄養を再びネグロスの土に戻すことはできない。それを自立基金という形でネグロスに還元しているのです」という言葉を遺している。人や組織だけではなく、土を育てることの重要性を説いている。これこそグリーンコープの食べものの運動に起因していることだと堀田さんは言う。「JNCNCは社会的開発および正義を目的に運動している組織です。それとグリーンコープの柔らかな食べものの運動との融合です。そういう意味では、グリーンコープがなければネグロスとの連帯は成立しなかったと言えます」。

グリーンコープとネグロスの出会いやマスコバド糖とバランゴバナナの民衆交易のはじまりは、グリーンコープの設立と時を同じくしている。まさに時代の偶然性であると同時に、同じことは再び起こりほしくないだろう。ネグロスと共に

の前身生協である「ちくれん」の兼重正次さん（グリーンコープ連合初代副会長）と

今では民衆交易のシンボルともなっているバランゴバナナ。その輸入計画がスタートしたのが、1988年8月。商品として劣悪なマスコバド糖の品質向上のためにネグロスを再三訪

「土地なし、金なし、力なし」のネグロスの人たちと連帯するには資金が欠かせなかった。1kgに付き50円という自立基金によって、人が育ち、組織が育成され、活動を支えることができた。それはとても意味のあるものでした。一方兼重さんは、「本来ネグロスの

「From Negros」。ATJの事業は、今まさにネグロスからパレスチナや東ティモールなどへ広がろう

と

堀田さんはその当時、ネグロスの飢餓やさとうきび労働者への緊急支援のため

に立ち上がった日本ネグロス・キャンペーン委員会（JNCNC）の事務局長だった。日本とネグロスの民衆による交易をスタートさせ、翌年の3月、自立基金50円を含んだ価格のマスコバド糖が日本に到着。しかし、それは到底商品と言えないものではなかった。その後、マスコバド糖はグリーンコープとの出会いによって

導かれたほんとうの相互連帯

ネグロスを越えた民衆交易事業の確立をめざす

と

「砂糖の島」と呼ばれていたネグロス。民衆はさとうきび労働者として大地主の支配下で生きるしかなかった

「From Negros」。ネグロスが教えてくれたことが今アジアへ広がろうとしている

「砂糖の島」と呼ばれていたネグロス。民衆はさとうきび労働者として大地主の支配下で生きるしかなかった

「砂糖の島」と呼ばれていたネグロス。民衆はさとうきび労働者として大地主の支配下で生きるしかなかった

「砂糖の島」と呼ばれていたネグロス。民衆はさとうきび労働者として大地主の支配下で生きるしかなかった



「From Negros」。ネグロスが教えてくれたことが今アジアへ広がろうとしている



「砂糖の島」と呼ばれていたネグロス。民衆はさとうきび労働者として大地主の支配下で生きるしかなかった

「砂糖の島」と呼ばれていたネグロス。民衆はさとうきび労働者として大地主の支配下で生きるしかなかった

「砂糖の島」と呼ばれていたネグロス。民衆はさとうきび労働者として大地主の支配下で生きるしかなかった

「砂糖の島」と呼ばれていたネグロス。民衆はさとうきび労働者として大地主の支配下で生きるしかなかった

「砂糖の島」と呼ばれていたネグロス。民衆はさとうきび労働者として大地主の支配下で生きるしかなかった

グリーンコープ

組合員
ワーカーズ
職員
リー・メッセージ

未来へつなぐ20年 私の思い

グリーンコープの20年という歴史の中を、多くの
人、多くのコトが駆け抜けていきました。その一つ
つがグリーンコープの中に刻まれ、グリーンコープ
の成熟へとつながってきています。この一年間、さ
ざまな人をおしてグリーンコープの歴史をひもと
いていきます。

グリーンコープ誕生20周年を記念して、組合員・ワ
ーカーズ・職員からのリー・メッセージを掲載します。



38歳の時に大きな転機がありました。ささやかな私の人生の中で最大の困難を抱えて自分を見失い、何とか自分を取り戻そうとしていたのです。その時の自分を立て直していく過程で、これからは自分が本当に意味があると思うこと、本当にしたいことをして生きていくと決意した覚えがあります。ちょうどその頃、春まだ浅き季節に、一組合員だった私はグリーンコープの春のつどいに参加して見ました。恒例の委員決めもありました。たまたまその頃興味があった社会福祉の勉強をしていたので「福祉の委員ならやってもいいです」と、地区の福祉活動委員になったことがはじまりでした。

委員になって、グリーンコープのいろいろな取り組みに参加する中で「グリーンコープ」という生協をより深く知るようになりました。中でも、福祉委員として関わった「福祉活動組合員基金」創設のための組合員の合意形成に向けた取り組みの中で、私はグリーンコープともう一度出会い直したという実感を持ったことを懐かし

グリーンコープと出会い直して仲間と共に新たな道を

福祉ワーカーズ連合会理事長 江島 真弓

私たちの地域にも「たすけあいワーカーズSunあい」が設立され、福祉委員と兼務で設立当初からかわりました。

そして、先の決意です。自分の本当にやりたいことが「たすけあいワーカーズ」だったわけですから、過去に数回ワーカーズの話をしてほしいと依頼された時、自分でつけるタイトルはいつも「たすけあいワーカーズの魅力と可能性」でした。私にとってその魅力の根源は何か。仕事の中身ももちろんですが、やはり「ワーカーズ」という働き方にあります。

いつの間にかワーカーズを中心を担うようになり、今度は「福祉ワーカーズ連合会」の理事長をさせていただくことになりました。グリーンコープとワーカーズをこよなく愛する人間にとってこの上なく光栄なことです。

ワーカーズの事業のすべてを社会福祉法人「グリーンコープ」の傘下で行えないかということと、この「福祉ワーカーズ連合会」を基軸に「グリーンコープワーカーズ連合会」の創設が構想されはじめました。グリーンコープのワーカーズはより主体を強く持たたいと思います。そして、構想されていることの意味を自らの身に引き寄せ、さまざまな困難も知恵と力を出しあい乗り越えていこうとする仲間と共に、新たな道を歩いていきたいと思っています。

春の組合員のつどいに3カ所参加する機会があった。急ごしらえの劇団ながら、活動の内容を分かりやすく説明しようと努力しているところ、簡単な料理教室を間にはさんで牛乳の利用普及をできているところ、キーキバキングで若い人があふれんばかりのところ……とそれぞれに地区委員会が趣向を凝らしているのがうかがえた。委員会が元氣なのはいい。

水保でのつどいの後、小規模多機能施設「ほのぼの」を見学した。昼食後で、利用者の方々は思い思いにくつろいでいる。コタツに2人の女性が寝そべって、顔を突きあわせて何やらモゾモゾと話しあっている。話

夢ハかたちに

元共生社生協やつしろ理事長 梅田 玲子



はお互いに噛みあっているとは言えないようだが、そのようすはほのぼの。幼い頃、友だちの家の上り框で話に夢中になりながら、そのまま寝入っていたのを思い出した。そういう光景はもう見られなくなってしまうが、彼女たちは記憶の「今」を生きているようだ。

20年前、「あなたたちは合併し、連帯して何がやりたいのか」のひと言がすべての始まりであった。それは互いの違いに固執する理事長たちの姿にそう発せられはならなかった行岡氏（前グリーンコープ連合専務理事）の苛立ちと策略だったかもしれない。理事長は合宿を繰り返し、真剣に話し合いを重ねた。ま

「我が胸の

燃ゆる思ひにくらぶれば

煙はうすし 桜島山

平野国臣

鹿児島を象徴する景観に「桜島」があります。こつこつとした山肌、山頂から昇る噴煙。そこには、幾たびもの噴火や絶え間ない浸食が織りなしてきた壮大なドラマを感じさせるものがあります。2月初旬、最近大

人しかつた桜島が久し振りに爆発し、高々と噴煙をあげました。それは10年ぶり

「燃ゆる思ひ」を胸に

グリーンコープかごしま生協

専務理事 本田 慎一

地に刻みつけてきました。残念ながら、私は入職してから15年しか経っていませんから、33年前の設立当時やグリーンコープが結成された20年前でさえうかがい知ることしかできません。けれど、きっと、先達も同じように桜島を眺めながらさまざまな思いを胸にグリーンコープかごしま生協を創ります。

に開催した役員合宿の最中のこと、まるで「20周年頑張ろう！」と氣勢をあげる私たちに呼応して、力強く、感慨深いものでした。グリーンコープかごしま生協も、前身の姶良郡市民生協の設立から33年にわたる歴史を鹿児島

あけてきたのだらうと思います。グリーンコープでは、これまで取り組まれてきたことの一つひとつが、人や組織の中に蓄積され、商品（食べもの）や運動の中で表現されています。これは本当に自信をもって多くの人に伝えていくことだと私は考えています。

冒頭の歌をメッセージに込めて、グリーンコープにかかわるすべての人々が、「燃ゆる思ひ（グリーンコープ・スピリット）」を胸に、職員や組合員そして生産者・メーカー、地域の人々に伝え、グリーンコープをもっと地域に根付かせ、広げていければと願っています。私たちグリーンコープかごしま生協も、20周年をみんなで見守り、桜島のように力強く盛り上げていきます。頑張りま